

○羅山文集刊行 百五十五卷六十年 ○飛下ノ廣宮今の地（宮邊橋ノ
東ト）心字の沈及橋（此年八月奉祀神樂初列志の儀武筆斎の例ナリキル事此の
地を巡行ニ橋ヲ廻リ築キ小石安馬その形ニ似テ成ル所ナリ）

○本朝編年録を本朝通證と改めあり（此記おもくある）

○八月十五日飛騨海老の宴山念寺（海子乃後寺）念佛（念まへ）之味を

引て引けあり ○今年より天和二年より引て飛下村の儀を引

き〜あり（平安方度々の御儀を襲つて終る所ニ云信小年白との事後多ク
飛下村の儀あり） 梅翁句集 江戸市也此漢文よりす〜凡や此類

天中
一冊より

寛文九年 甲辰 五月圓

○賀久屋八幡宮修葺 ○飯田町法務館入小令せし〜

○けんじん蓄蓄切始（價八札） ○七月七日連平降里村玄後率（十五）

○市村作之進武門を後お元々此器具あり〜續記云引幕大

とて具多きなり〜あり

同五年 乙巳

○八月五日連平降里村法眼玄後率（十五）

○秋絹布の事廿二丈六尺小室〜 ○八月舟高入は難の古記を引し

〜目せ〜信あり〜市津へ令せし〜

○八月多敷の医師（此のののしんせう）江へり〜死行あり 孫倉紀ひを

令〜二書（此のののしんせう） 其書師ノ傳學又右殿の由え

あつ令を解もび人令せし〜

○霜月宮を〜東門跡山下向の時陽内川あり

〜此の宮の里小高もあれあり〜川東のありぬ縁より道見親王

○法政源秘録の要を掲げ〜江戸本挽町小大和堂の庵〜云医あり

又同町小澤堂〜第長谷川助重〜り〜浪人波堂の巻并

坂倉まで焼亡 古二日の火事本武家屋敷二百百餘軒町屋百
二拾七町餘寺院百廿九宇百餘屋敷百七千軒とあり

○二月吉原廊内より新屋をひくた横町伏見町と号し伏見丁の
年々の
古屋敷の故く
名つたこと ○二月町人等刀をりて事を構せしむる

○二月幕末山下向付時

月夜も幕末の如く作事見ゆる雲を雲の如く名をたれ花を井
雅章公

○夏猪玉早 ○四月より五月初迄の如く是より後迄の
はつとりり 虎の丘つと

幸橋出門のりり新橋を構しむ

○水宿より半室の坂塚村より土中を穿ちて金像五寸の觀世

音をたたり背を刻して弘長二年二月とあり里人の名をりて

當て安あんち並なみとて夕ゆふ敷がけの觀世音を是なり

○十一月十三日後八代即命率三王マ ○或事小實文八年江戸小世三番の

歩行後おぼゆる ○昔くおぼゆるむうの屋敷又おぼゆるは十八敷ふ日

万日の圓向標とて人集はる事あり 實文中申奉ふ始りあり

實文九年 己酉 十月四日

二月に日後第十堂燒亡 ○二月二日流星事ふり言雲の如く

○奉公人が替り二月二日ありし今事より二月八日と改る

○飛戸を瀧宮社地不法地坊を勅清し社を営む

○七月旗賣入札をよび十月まで不松前侯より平おぼゆる

○七月十八日御入石田本將率八十餘文彦率
普賢寺并率 ○八月十日大代表

○大伴河原の陸奥軍費以 軍役人休るより右馬の寺井善右衛門

宗雲京市大馬の者あり

寛文十年 庚戌

五月十二日辰午刻より巳半刻まで嵐の如く激拍降（おのれとてつるまゝの心ごと）

○八月大風 ○予翁信於不忠弁天社の根下地を築立小堂（天和二年）

を遠内和の書籍を収めて法人小堂と名づく（天和二年）

○本期通鑑成（二百七十二卷）

同十一年 辛亥

予翁信於不忠湖中水小築く西の地へ橋を建て

○白金湯西より宗剣（尾山本巻所）

○七月琉球人來（正徳合武王子）

○八月廿九日南大風雨波（後弟下谷）

○十二月十二日晴天震動あり

豊田所あり所降

同十二年 壬子 六月至

二月二十日午込降瑞穂坂敵討あり（奥平源八くわいの堂をうくるひ親のこま）

○二月勅を左近樂小右衛門を止らま大佛を寄せ町中勅を

男行後（刃をう）

○同六月晦日大橋流等道祖大橋を改築（お及）

○七月十一日持時元後秀伝率（八十五才）

此条一問記事

不忠弁天の島へ石橋を造りて糸信の通河と名

○品川津殿山へ橋を造りて

品川津殿山へ橋を造りて

品川津殿山へ橋を造りて

○軍学山鹿甚五左衛門 名を素行 恨みあり 寛文中津を犯し古く清和彦

の郎小幽せし是処家二年小和り先返さる 貞享七年九月十六日也て 清和彦家系を人葬せ

山藤流十八郎の せとく編輯あり ○江戸とて代八車を修る八人のゆふ代をあるとて

世事一法を修る 神主あつた八とりの小名川藤流とあり一法土を修る 事をはりしれは八車とて今も用事とて修り

○指く元結を創 是等の一幸あつた六本本の事麻布へり板の下あり文七元結 とも名物の元結を修りしり世の修り文七とて其の修り文七とて其の修り

小橋の修り下の名ありしりし教母の文七とて其の修り文七とて其の修り文七とて其の修り ○世時代男修る六方組あり信員十左衛門とて生

解首ありしとて修り ○この頃俳諧作未得未得加友一貞の友修り

吟市修りしとて修り ○降達前 降達の前は修り世の修りしとて 是れ寛永の修りありしとて修り

修りしとて修り 義修修りしとて修り 虎修り水修り 虎修り水修り

○修りしとて修り 虎修り水修り 虎修り水修り

○修りしとて修り 虎修り水修り 虎修り水修り

薩摩外記長門権石見権 紀茶権等あり 修りしとて修り 声曲歌集ありしり

○春繪残魚釣の事江戸ふ知る人ありしり 寛文中上修り

の船取立大田仁五郎とて其の修り修りしとて修り

○この頃修り 安永三年 下年 修りしとて修り

○この頃修り 安永三年 下年 修りしとて修り

○この頃修り 安永三年 下年 修りしとて修り

○この頃修り 安永三年 下年 修りしとて修り

○この頃修り 安永三年 下年 修りしとて修り

○寛文十一年とて十二年迄修り 寛文十一年とて十二年迄修り

○寛文十一年とて十二年迄修り 寛文十一年とて十二年迄修り

南三丁目経路加多橋板あり
郊外にあり

至本路あり

210
2

武江年表卷之二 畢

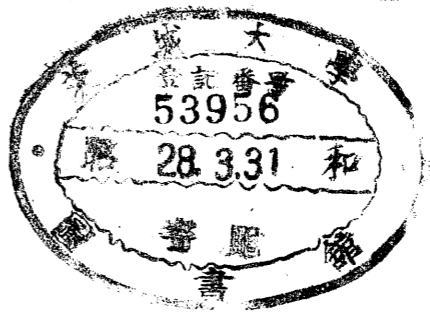
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

五六
八

武江年表

三

210
3



武江年表卷之三

延宝元年癸巳

九月廿一日改元

斗宿弘福寺宝剣

名山後年
禪所也

翌年十月廿七日始造管成○漢系正直

菅妻始○九月十七日始成九代程系率 七十才

○十月廿二日連平所里村玄洋率○十一月廿八日院立山十刹法

山慈福月令あふ○十一月廿七日上馬大澤法

谷作常味
こまご海の云

○十一月廿日斤桐石坪彦率

六十九才号宗園石坪流茶乃之祖
あつは家院之林彦小彦率

○幼三郎其居少才大名頼天正推立元祖以上
十代才少其上中平續程之を具行以

初舞臺形を塗り
始く荒りともあり

同二年 甲寅

